

巻 頭 言

早稲田大学教授
CAUA 会長

後藤 滋樹

情報通信技術 (ICT) は人類の敵か味方か。これは将来の人工知能の話ではなく、現在の我々の日常生活の話である。我々はインターネットを使いこなしている。これほど便利なものはない。特に活用したいのは他人に仕事を頼む時である。昔であれば相手のオフィスを訪問しても不在であったり、手紙を出しても返事がない。電話を掛けても出ない。もし相手が海外出張の場合には、お手上げであった。今では電子メールで簡単に仕事を頼める。不思議なことに海外出張の最中の方が返事が早い人もいる。

一方で、我々は仕事を頼まれる側である。電子メールは都合の良い時に読めば良いから、自分のペースで仕事ができる (ように見える)。ただし受信メールの数が 20 通、30 通、40 通と増えていくとメールを読むだけでも骨が折れる。ARPA ネットの昔から、人間が一日に読めるメールの限界は 200 通であると言われていた。短いメールでも積み上がると、まるでインターネットのサーバに対する DoS (サービス妨害) 攻撃のようになる。メールごとに話題が変わると頭脳を切り替える必要がある。これも人間が疲れる原因である。

さらに電子メールの暗黒面にスパム (spam) がある。以前にドメイン認証の技術が提案されたときに「半年後にスパムが激減する」という予言があった。実際には、それほど簡単ではなかった。

今までのように、人間が直接に入力するインターネットでは我々の睡眠時間が短くなる一方だ。できるだけ人間が入力せずに済ませたい。これを IoT (Internet of Things) と呼ぶ場合もある。その膨大なデータを受取るのが生身の人間ではかなわない。受信側も things に頑張ってもらいたい。ここに人工知能への期待がある。